



群馬県

# 赤城車体工業(株) 赤城英夫社長

## キャリアアカーオンリー。文化地域活動も 群馬県館林市

群馬県内にある赤城車体の社名から、国定忠治の籠もった上州名山「赤城山」からの命名かと思ったが、社長の家名だった。

製造する車体はほぼ100%キャリアアカーで、社長のお父さんに当たる三男さんが長年、これもキャリアアカーで実績のある細谷車体の社内外注のリーダーとして活躍した後に独立したそうだから、当然だろう。

三男さんは、典型的な職人肌の人物だったようで、独立後も数人の職人

を使って、コツコツと気のゆくまでキャリアアカーを作っていた。

仕事があれば、嬉しくて休日も夜もいとわれない、という根っからの職人肌で、カネ勘定を考える経営者という感覚はあまり持っていなかったらしい。

このままでは、単なる職人集団になつて、企業として効率的なモノ作りができなくなる可能性がある。

また、受注が少し多くなると、少人数の職人集団では対応できなくなるおそれも出てくる。

若い賢社長は、従業員を多少増やしても、効率的なモノ作りを目指すべきであるとして、会社のあり方を変えた。

三男さんの頃は、3〜5人だった従業員も、15〜6人まで

増やして、3年前に新設した本社工場では新車の架装、従来の野田工場(千葉県)では中古の修理・改造を主体にすることにした。

その新体制で、リーマンショックの前には、客が客を呼ぶという形でユーザリーの信頼を得て、年間30台余りのキャリアアカーの受注があつたが、昨年はそれが6分の1の5台にまで激減した。1カ月間、仕事がない状態が続いたのである。

これは同社だけでなく、キャリアアカーのメーカーはどこでも同じだったが、本社工場は事務方だけでガラガラになつた時期もあつたという。

しかし、それでも何とか凌ぐことができて、今年は4月頃から回復してきているらしい。

応接室に「心」の字を銅に打ち出したような珍しい置物と、新聞記事の切り抜きがある。

聞いてみると、叔父さんに鍍金の名工といわれた針生清司氏がいて、その作品だが、新聞記事になつたのは、赤城社長が2006年(平成18)に館林市に寄贈した「宥坐之器(ゆうざのき)」という吊りさげの水甕のようなものである。

中国古代にあつたという本物は人の背丈ほどもあるそうだが、水が空の

時には傾き、ある程度水を入れると水平になり、一杯になるとまた傾く。孔子が弟子に、この器を見せて「満つれば欠ける」中庸、謙譲の徳の大切さを教えたという故事に因んで、多くの絵に描かれている。

針生氏は、各種の文獻に当たつてこの「宥坐之器」の復元に挑戦、完成品を赤城車体に持ち込んだが、多くの人に見て貰つた方が、と館林氏に寄贈したという記事である。

赤城社長は、従業員の給料日には早朝に従業員を動員して、工場から学校への500mほどの道路清掃ボランティアをしている。

企業は、単に金儲けをするだけでなく、応分の文化活動をしたり、地域貢献を果たすべきである、が筆者の意見で、毎月の論語講座もその実践である。

初訪問の赤城車体で、文化も地域活動も

心得た赤城社長の爽やかな人柄に接したことを喜びたい。



同社内で製造中のキャリアアカー



増田周作が往く  
群馬県  
赤城



赤城英夫社長